

父の傘

ふとした拍子に記者が聞いた、ある女性の傘の思い出。
五分間のお話を一段落にまとめました。

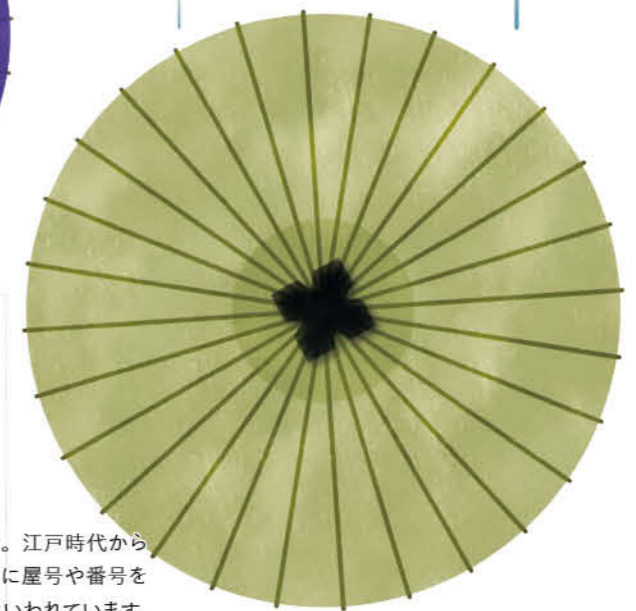
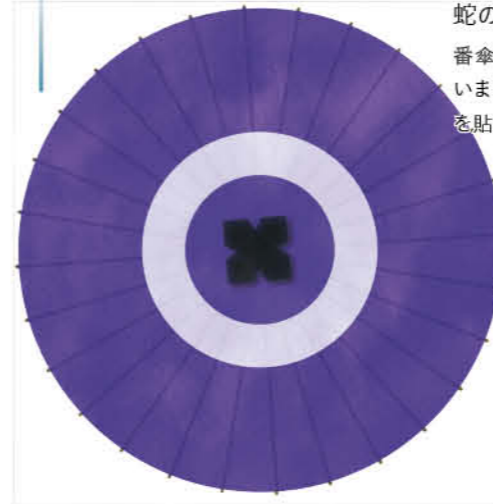
雨が降ると、父が作った傘を思い出します。私が小学生のころ、父は港に近い自宅を作業場にして、番傘や蛇の目傘を作っていたのです。作業場にあった紫色の蛇の目傘を見て「きれいだな」と思ったのを覚えています。

私が学校に持っていくのは、父が作った番傘でした。昭和三十年代、すでにこうもり傘が一般的になっていて、番傘をさして登校していたのは私だけでした。重たい番傘をさすのがつらくて、わざと破ってしまったこともあります。でも、番傘そのものを嫌いなわけではありませんでした。

傘を開くとき、ぱりぱり、と和紙が鳴る音がたばた、と雨が傘に落ちる音。番傘の記憶は、今でもその音とともに、心地良く思い出されてくるのです。

蛇の目傘

番傘を改良して作られ、番傘より軽く細身で、主に女性が使用していました。中央と外縁に青、紫、赤などの紙を貼り、中間に白い紙を貼るため、開くと蛇の目のような模様が現れます。



番傘

竹の骨組に紙を貼り、油を引いて作った太身の雨傘。江戸時代から庶民の間で普及しました。商人の家で客に貸すときに屋号や番号を入れていたことから「番傘」と呼ばれるようになったといわれています。

このお話には「傘」のほかに、「槍」「家系」にまつわる思い出もありました。全体をWEBでお読みいただけます。
「ことの葉舎」で検索 <http://cotonoha.biz/>



ことの葉舎

地域情報誌『たまきたPAPER』発行
情報誌・自分史等の編集制作・出版

東大和市立野 3-572-2 コートコア東大和 202 (朝日新聞 2F) ☎ 042-507-2385 Mail info@cotonoha.biz

水辺のそぞろ歩き

たまきた地域のおすすめ水辺あるきスポットをご紹介します。朝夕の涼しい時間を選んでお出かけください。

「たまきたまっぷ」水辺で安全に楽しむための情報も読めます



歩

き出せば、すぐそこに清涼な風も揺れた初夏でした。突然社会が変わっても、変わらない自然に触れることで落ち着きを取り戻せる気がしませんか。

多摩のあらゆる街を歩いてきたウォーキングのスペシャリスト・西村洋一さん(アルキニスト倶楽部代表)が、夏歩きの楽しみ方を教えてくださいました。

「日差しが強いときに長時間歩くのは大変です。でも、運動不足は健康を損ねます。この季節に最適なのは、水辺の木立の散策です。玉川上水沿いや多摩丘陵沿いの水場の散策はとても良い気分転換になります。日差しを遮る帽子、飴などのエネルギーと水分を備えて、熱中症対策をお忘れなく。」

玉川上水

江戸時代に、江戸に水を供給するために開削されました。羽村堰から現在の新宿区四谷まで水路が築かれ、かつては船が通ったことも。そばを通る玉川上水緑道は木陰が続き、爽やかに散策できます。



野火止用水

江戸時代に玉川上水から分水され、現在の埼玉県新座市野火止の地域へと引かれた水路。歩道の脇で静かに水が流れ、小エビやザリガニの姿に子どもたちが目を輝かせるノスタルジックな風景です。



空堀川

武蔵村山市から流れ、東大和市、東村山市を通り、清瀬市へと流れます。遊歩道が整備されており、川遊びができる場所もあります。サギやカワセミなどの水鳥にも出会える、開放的な散歩スポットです。



たまきた PAPER 2020 年夏号

©Kotonohasha Co.,Ltd.

本誌に掲載されているコンテンツ(文章、画像等)は、著作権法、関連条約・法律で保護されています。これらのコンテンツについて、権利者の許可なく複製、転用等することは法律で禁止されています。